

上越市寺町2の料亭長養館は1992年、明治期の移転新築から100年を迎えた。この間、電気やガスが入り、冷暖房の設備を加えるなど手直しを重ねてきたが、建物は使い勝手の悪さが目立つようになっていた。

開発大手「森ビル」(東

にいがたの老舗 100年の系譜

京を辞め、83年から専務として長養館に戻っていた吉原耕一氏(55)は「現社長は『貴重な財産だ』として木造建物を残すことを主張。父で社長の恵一郎氏(82)は現会長も賛同した。だが木造での改修は、建築基準法や消防法の制約

宴に時代映す

長養館 (上越市) ④

木造守り苦心の改修

サンデー経済



長養館を支えるスタッフ。「従業員や出入りの業者さんを大切にしろと代々言われてきた」と吉原耕一社長(前列左から4人目)＝上越市寺町2の長養館

から建坪を変えられない難業を訪ね、直後に設計者のしさがあり、設計の引き受け手は見つからなかった。悩んだ耕一氏が、建築専門誌で目にとめたのが静岡県の有名旅館蓬萊(現昇熱海)の写真だった。奇をてらわず、人をくつろがせることに心を砕いた建築に強く引かれた。実際に蓬

もてなし充実 客層広げ



一部屋ずつ意匠の異なる室内。どの部屋からも700坪の庭を眺めることができる。上越市寺町2の長養館

三つの小座敷に分け、格が高いとされる書院造りは、あえて簡素な数寄屋建築に変えた。天井を低くし、畳の縁を通常よりわずかに細くするなど、客の心地よさにミリ単位でこだわった空間が完成した。

外観も、長養館の代名詞となった。高田ゆつたりと流れる時間、広い庭を見渡す部屋で味わう料理は、都会の料亭にはできない時空を含め、外から眺めるだけだった女性など新しい取り込む策を練る。

「長養館は高田とともに歩んできた。これからは、居続けて帰ってこない、振り返る男性など3代にわたる客もいた。」

大規模な宴会は減ったが、よりゆつたりと料理を楽しむ客は増えた。勤務歴26年の池田止治板長(48)は「長養館の料理に期待して来てくれているんだと常に若手に言っている」と、伝統の重みをかみしめる。

経営環境は厳しさを増して、店舗を構える上越市には15年春、北陸新幹線が通る。12年に社長に就いた耕一氏は、日帰り圏が広がり、市内での滞在時間が短くなるなど、負の影響が生じる可能性を直視する。同時に、

改修後は、平均2時間ほどだった宴会が3時間になった。95年に官官接待が取りざたされると、年間1千万元以上あったという県内先機関係者の売り上げが、翌年はゼロになった。だが、長養館には希望もあった。市内の料亭に先駆けて始めた予約制のお店の膳は、長養館を外から眺めるだけだった女性など新しい取り込む策を練る。

(おわり)